

序論 「北の想像力」の可能性

岡和田晃

## 一、《北海道文学》の危機

本書は、「北の想像力」の可能性を問うために編まれた評論集である。

ここでの「北」とは、北海道という特定の地域を、第一に想定したものとなっている。北海道を主題的に扱ったフィクションを論じたもので、広義の《北海道文学》を論じた書とご理解いただいて差し支えないだろう。

《北海道文学》とは、北海道を舞台にした、あるいはその内実において北海道と強く結びついた文学の総称として、しばしば用いられてきた言葉である。明治期以降の近代日本において、北海道は、日本という国民国家の内部（ネーション・ステート）に留め置かれながらも、常にナショナル리티の枠組みから逸脱することを余儀なくされてきたトポスであった。

その原因として、北海道の「内地」（本州）と大きく異なる気候風土がよく指摘されるが、同じくらいに決定的な要因として「アイヌ」から土地を収奪して開拓を行なったという成立事情が挙げられる。国木田独步（一八七一～一九〇八年）の短篇小説「空知川の岸辺」（一九〇二年）が体現しているように、豊穡なる「自然」が残る土地・北海道とは、近代日本においては「内地」によって「発見」された場所にほかならなかったのだ。

《北海道文学》をめぐる言説は、明治期から断続的に蓄積されてきた。ナショナル리티の復興が求められた戦後、一九五〇年前後からは、北海道内の新聞や文芸誌において、《北海道文学》をめぐる議論が活発に行なわれるようになった。そこでは「北海道的なもの」「北海道性」の性質が、しばしば問い直されてきた。

戦後の《北海道文学》を理論的に牽引した批評家、小笠原克（一九三一～二〇〇四年）は、北海道大学出身の仲間たちと「北海道評論王国」と呼ばれる一時代を築いたことで知られるが、小笠原が初代編集長を務めた雑誌「北方文芸」（一九六八～一九七七年）は、《北海道文学》を代表する文芸誌として威名を轟かせた。アイヌ初の近代小説家である鳩沢佐美夫が立ち上げた「日高文芸」（一九六九年）が、小部数の地方同人誌でありながら、「開発」や「マイノリ

ティ」の問題について、驚くほど先駆的なメッセージを発信し続けたのも注目に値する。こうした成果が助けとなって八〇年代には全国初の地方文学全集「北海道文学全集」全二十二巻（一九七九～八一年）が実現する。

とりわけ六〇年代から七〇年代にかけての《北海道文学》ブームの背後には、北海道開基百年（一九六八年）、札幌オリンピックの開催（一九七二年）、加えてバリ五月革命（一九六八年）に端を発する世界規模の学生運動の広がりといった政治的状況が、このうえなく強固な影響を与えていた。

つまりは何よりも社会が、文学を要請していたのである。《北海道文学》の最盛期には、たとえ地方同人誌でも、二千部を超える売れ行きを見せることが珍しくなかったという。

その頃と比べれば、《北海道文学》ブームは落ち着きを見せている。若い世代の情熱の対象はむしろサブカルチャーに移行し、当の《北海道文学》は一種の制度として歴史化された。率直に言って、《北海道文学》という枠組みを通して北海道という風土性の如何を問うことは、少なからず時代遅れとみなされているようだ。

言うまでもなく、北海道立文学館や小樽文学館等、各種の施設の積極的な展示・講演活動やワークショップの開催、道内の各大学や自治体が協力した粘り強い啓蒙活動、同人雑誌等有志による文学運動は持続的に行なわれており、その成果を過小評価しようというものではない。道内の新聞やタウン誌等で、北海道文学について言及される機会も依然として少なくない。

けれども、紹介者たちの献身的な努力の一方で、《北海道文学》の傑作群の多くに、現物として触れるのが難しいという状況はあまり改善されていない。六〇年代後半から八〇年代にかけて「再評価」された作品もあるにはあるが、現在では、そうした作品であっても、実際に現物を参照するのが難しくなっている。

地方同人誌はいまだ全国有数の規模で活発な活動を見せているが、概して参加者は高齢化している。たまに中央文壇で注目される書き手が現れても、同人誌での活動は単なる修行時代とみなされるのが関の山だ。控えめに見積もっても、《北海道文学》は危機的状況にあるだろう。

何より問題なのは、ショッピングモールのごとく画一化する「地方」の実態を反映するかのように、その文学活動が社会的にインパクトを与えようという期待がなくなっているということだ。《北海道文学》を知的財産として顕彰する姿勢こそはあれども、それを同時代的な議論の対象とする機会には、絶望的なまでに少ない。これでは、残念ながら《北海道文学》の未来は暗い。

今こそ、《北海道文学》をアクトチュアルなものとして、再生する必要があるのだ。

## 二、SFという視点の導入

本書では《北海道文学》再生のために、SFという視点を導入する。

SFとは、「サイエンス・フィクション」＝「空想科学小説」の略称である。つまり、近代科学の視点を取り入れた文学ということだ。

SFの起原は諸説あるが、トマス・モアの『ユートピア』（一五二六年）、ヴォルテールの『ミクロメガス』（一七五二年）、メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』（一八一八年）等が、その起原として設定されることが多い。

文学ジャンルとしてのSFの基礎は、ジュール・ヴェルヌの『海底二万里』（一八七〇年）や、H・G・ウェルズの『タイム・マシン』（一八九六年）、『宇宙戦争』（一八九八年）等の名作によって築かれたとされる。

日本においても、明治期から海外の名作SFは積極的に翻訳紹介されてきた。加えて、振り返れば、『古事記』や『竹取物語』の時代から、国産SFと呼ぶことのできる作品が、連続と書き継がれてきたと理解することもできる。戦前のSFを研究し、それを紹介する動きも現在は盛んだ。

しかし、現代の日本SFに直接連なる流れとしては、戦後の『宇宙塵』（一九五七～二〇一三年）、『SFマガジン』（一九五九年～）という二つの雑誌が重要な出発点となっている。この二つの雑誌の影響を強く受けて、戦後の日本

SFは発展を見せてきた。

北海道も例外ではない。一九六五年には北海道初のSF同人誌「コア」が創刊され（六七七年）、その衣鉢を継いだ「イースカーチャリ」誌（一九七〇～八九九年）は、二〇一一年より、他のSF同人誌と合同という形ではあるが、刊行を再開した。北海道でSFの同人活動が始まってから、すでに半世紀近い時間が経過しており、荒巻義雄（一九三三年～）、川又千秋（一九四八年～）（ともに小樽市出身）らのプロ作家を輩出している。

しばしば見落とされることだが、戦後、文学を通して「地方」のアイデンティティを問い直す動きと並行するかのように、「内地」から遠く離れた北海道でも、新しい文学としてのSFが、とりわけ若い読者の期待を集めていたのだ。

特に一九六〇年代から、SF界は——狭義の「サイエンス」だけではなく——「スペキュレーション」（思弁性）を重視する「スペキュレイティブ・フィクション」という枠組みをもって理解されるようになってきた。「スペキュレイティブ・フィクション」は、従来の工学的なSF観を厳しく批判しながら、シュルレアリスム等の現代美術、フロイトやラカンの精神分析等の視点を導入することで、SF概念の抜本的な刷新をはかった。こうした運動を「ニューウェーブSF」という。

「ニューウェーブSF」を提唱したのは、イギリスのJ・G・バラード（一九三〇～二〇〇九年）だが、日本における「ニューウェーブSF」の第一人者は山野浩一（一九三九年～）だった。荒巻は山野との論争の成果物である「術の小説論——私のハインライン論」（一九七〇年）でデビューし、また川又は山野の主筆した雑誌「NW-SF」（一九七〇～一九八二年）で批評家・小説家として本格的な活動を開始した。

荒巻にしる川又にせよ、その出発点は「ニューウェーブSF」にあったのである。

### 三、「北海道文学」と《北海道SF》

加えて「ニューウェーブSF」は、文学とSFを取り結ぶ試みでもあった。

戦後日本文学を代表する作家としては、ノーベル文学賞の有力候補とも目された安部公房（一九二四～一九九四年）がいるが、安部はSFにも深い理解を示し、「SFマガジン」の創刊号にコメントを寄せ、新人の登竜門としてのハヤカワSFコンテストの審査員をつとめるなど、若手の発掘にも力を注いだ。

現在の日本SFの出発点には安部公房がいた。そのことは、「ニューウェーブSF」がモダンズム文学の成果を引き継いだ「ヌーヴォー・ロマン」と共振する運動でもあった背景にも由来するという歴史的経緯以上に、日本SFの出発点に越境的な感性が根付いていたことの証左となるだろう。

一方で、「ニューウェーブSF」と、先に述べた《北海道文学》ブームは同時代の現象でもあった。ところが、文学とSFの幸福な関係は安部公房という一人の作家性に負うところが大きかったようだ。「コア」にしろ「イヌカーチェリ」にせよ、「北方文芸」や「日高文芸」がそうであったように、風土性を意識してこなかった。さらに言えば、両誌に限らず、SF界ではしばしば、文学は、お高くとまった硬直的なものとして揶揄されてきたのである。

対する《北海道文学》においても、SFは基本的に無視され、言及されても荒唐無稽なジャンク・カルチャーとして軽侮の対象となってきた。

むしろ、両者を繋ごうとする動きが皆無だったわけではない。たとえば「北方文芸」誌上において荒巻は「エッセンス・オブ・SF」という入門記事を連載した（一九六八年）。だが、同連載は明確な終了宣言もなく短期で終了している。

山野は、一九七三年に北海道で開かれたSFイベント（第十二回日本SF大会EZOCON）のパンフレットで「アイヌ」問題について簡潔ながら明敏なコメントを寄せている。だが、あくまでも所感として受けとめられ批評的インパクトを持ちえなかったのか、それが地域とSFについて、大きな議論に発展することは、ついぞなかった。

その他、細かな事例には事欠かないが、SFという観点で地域を発見しようという本格的な動きは、二十世紀の到来を待たねばならなかった。

二〇一〇年、東京で第四十九回日本SF大会TOKON10というイベントが行なわれた。このイベントに連動する形で、SFのフレームで地域を捉える、あるいは地域の観点からSF作品を再評価するという運動が開始されたのだ。そしてイベントの終了後も、地域をSFの観点で捉える動きは継続されてきたのである。

北海道の風土性に大きな影響を受けたSF作品、あるいは北海道が重要な主題となるSF作品を《北海道SF》として評価する動きは、この時から始まったとも言える。

地域SF運動は、当初はインターネット上での評論企画として開始されたが、やがてはSFイベントの公式プログラムブックにまで進出し、ついには「SFマガジン」二〇一〇年八月号の「特集・東京SF化計画」、財団法人静岡県文化財団より刊行された『しずおかSF 異次元への扉』（二〇一二年）と、商業媒体での成果としても結果を見た。

これらは、関連するSF大会の開催地に合わせて「東京SF」、「静岡SF」と呼ばれてきた。ただ、これまで「東京SF」や「静岡SF」を論じる際に、東京文学や静岡文学の伝統は、特段に意識されることはなかった。

それには二つの理由がある。第一に、これまでの地域SF企画は、本書のような大著としてまとめられるまでに至らず、狭義のSF内のフレームのみで事足りたということ。第二の理由としては、北海道という土地が、東京や静岡よりも、日本という枠組みから逸脱する傾向が強かったことが挙げられる。

実際問題として、荒巻にしろ川又にしろ、北海道を舞台にした作品はむしろ少数に留まる。芥川賞と日本SF

大賞の両方を受賞し、文学とSFをまたいで活躍する作家・円城塔（一九七二年）、札幌市出身ですら、その作風は北海道という地域性とは縁もゆかりもない……かのように見える。

そこで本書では、『北海道文学』と『北海道SF』を止揚するために、両者の交点を「北の想像力」というより大きな枠組みで理解しながら、各々の作家やその仕事を的確に捉えるため、多角的なアプローチを採用することにしました。

#### 四、グローバルゼーションと「北の想像力」

『北海道文学』に危機をもたらした根底には、東西冷戦後、加速度的に進行したグローバルゼーションの波に、ローカルな視点では抗えない<sup>1)</sup>という諦念が根付いているように思われる。

だが『北海道文学』は、当初から日本ローカルの文学に終わらず、ゲーテの言う「世界文学」としての志向性を強く有するものだった。北海道で初めて刊行された函館の文学同人誌「北海文学」（一八九三年）の巻頭言が、何よりの証左となろう。

題して北海文学と申候も北海敢て或る特定の文学を有し候義にはこれなく、又是れ世界の文学 (World Literature) に進めんと欲するものに御座候。

こうした「辺境」でありながら、なおかつ世界的であるという志向性は、戦後には土地の表象という側面を強調する形で、風巻景次郎の（北緯「四十度圏の思想」(一九四七年)、あるいは風巻理論を批判的に継承した中野美代子の『北方論』(一九七二年)に引き継がれてきた。風巻や中野の視点は、しばしば不当に軽視されてきたが、北海道の

風土性をグローバルな視点で再解釈するという意味で、今日のポストコロニアリズム理論を見事に先取りしているように見える。

それは、しばしば脱地域性を志向するSFの方法と、実のところ相性がよいのではないか。

ポストコロニアリズム理論は、十九世紀からの欧米列強による帝国主義と植民地支配の暴力が文化に与えた影響を、文化批評を通じて再考しようとするものだが、とりわけ「辺境」という枠組みに焦点を合わせて「帝都型思考様式」の抜本的な転倒をはかったテッサ・モーリス・鈴木（一九五一年）の『辺境から眺める アイヌが経験する近代』(二〇〇〇年)、グローバルゼーションによって個々の文化圏を取り巻く障壁が良くも悪くも融解した結果、従来の「比較文学」が不可能になったことを前提に、文化批評のスケールを惑星的なものにまで飛躍的に拡大させる必要性を謳ったガヤトリ・C・スピヴァク（一九四三年）の『ある学問の死 惑星規模の比較文学へ』(二〇〇三年)等は、広く「北の想像力」とアクチュアルに接続可能だろう。

また、ポストコロニアリズム理論が前提とするトランスナショナルな視点を推し進め、SF史の文脈をも視野に入れながら文学地図のラディカルな再編成をはかるポール・ジャイルズの理論 *The Global Remapping of American Literature* (二〇一一年)等を援用すれば、『北海道SF』を世界的に意義があるものとして読むことも充分可能となるだろう。

つまり『北海道SF』は脱地域性を志向してきたが、同時に、地域の意義を再帰的に証立<sup>2)</sup>てるツールともなるのだ。ゆえに『北海道文学』と『北海道SF』の融合という観点で「北の想像力」を捉えることは、『北海道文学』が培ってきた人文社会科学の伝統でSFを評価するのみならず、ローカルな立場からグローバルゼーションに正面切って向き合い、新しいヴィジョンと洞察を獲得するための批評実践にほかならないのだ。

## 五、本書の内容について

本書執筆陣の母体は、日本SF評論賞(主催…日本SF作家クラブ、後援…早川書房)受賞者有志からなる「プロジェクト北海道」である。この「プロジェクト北海道」から、石和義之、磯部剛喜、岡和田晃、忍澤勉、高槻真樹、藤元登四郎、宮野由梨香、横道仁志、渡邊利道が本書の執筆に参加(名前はすべて五十音順、以下同じ)。「プロジェクト北海道」の実務を担当していた岡和田晃は、そのまま編集を担当することになった。

そこに、倉敷茂、田中里尚、丹菊逸治、東條慎生、松本寛大の五名を迎えることで、新たに「北の想像力」執筆チーム」を結成し、本論集に収録する主要な論考群は執筆されたのである。この「北の想像力」執筆チーム」では収録論文へ相互に査読を行ない、その他、ブックガイドの執筆作業を分担した。査読にあたっては、しばしば侃々諤々の議論が行なわれたが、原則として個々の執筆者の思想や理念を尊重している。ゆえに、文責は個々の執筆者に帰属するものである。

また、ゲスト・ライターに橋本輝幸に三浦祐嗣と、世代の異なる二人の書き手を迎えることで、「北の想像力」執筆チーム」ではカバーしきれない諸分野について補完を行なった。第7部のブックガイドでは、浦高晃の協力も得た。

加えて、『北海道SF』の射程を理解いただくため、小谷真理、巽孝之、増田まもるらが参加した『北海道SF』についてのパネル・ディスカッションを文字起こしし、収録している(巽孝之の厚意により、その書評記事の再録も実現した)。

本書を通読していただければ「北の想像力」の意義について、具体的なイメージを持つことができるだろう。

執筆者の経歴について、より詳しい情報は巻末をご覧いただくとして、具体的に収録論文を見ていこう。

本書は7部構成となっている。冒頭から順番に読んでいただいてもかまわないし、各々の論考は独立しているので、興味を惹かれた論考から読んでいただくのでも、まったく支障がないよう編集されている。以下、収録論文を解説していきたい。

【第一部 「北の想像力」という空間】には、主に「イメージ」表象」を介して「北の想像力」の意義を問うた四本の論考が収められている。

巻頭を飾る田中里尚の「迷宮としての北海道——安部公房『榎本武揚』から清水博子『ぐずべり』へ」では、安部公房と清水博子(一九六八年)、世代も作風もまるで異なる二人の作品を介し、両者に強烈なインパクトを与えた「北の想像力」の迷宮性が仔細に論じられる。おそらく安部公房は、『北海道文学』と『北海道SF』を自覚的に両立させた最初の書き手だろう。田中論文では、「榎本武揚」という人物の評価をめぐるテクスト」としてメタフィクションナルに書かれた安部の長篇『榎本武揚』(一九六五年)を、北海道というトポスが有する「空間的・時間的にも複雑な存在のかたち」を体現した作品として読み解いていく。『榎本武揚』で採用された「方法」の根幹には、「ヌーヴォー・ロマン」や初期作品「名もなき夜のために」(一九四八年)で採用された「方法」的意識が伏流のごとく根付いていたが、それを共有した書き手として、清水博子が検討される。清水はデビュー作の「街の座標」(一九九七年)以来、「テクストを読むこと」の「迷宮性」を、エクリチュール(書かれた文章)に落とし込んできた。そして清水は、北海道という土地を捉えるために、「土地と人間をめぐる「サーガ」そのものを批評的に捉えようと試みていた。田中は、二人の作家が直面した幾重もの「困難」を、丁寧にあぶり出す。

宮野由梨香の「氷原」の彼方へ——「太陽の王子 ホルスの大冒険」「海燕」「自我系の暗黒めぐる銀河の魚」では、アニメーション、小説、コミックと、メディアをまたいで「北の想像力」が分析される。とはいえ、昨今のサブカル

チャー批評での通俗化した印象批評や表層批評と宮野論文とは一線を画している。宮野は、論じる対象の奥の奥まで入り込み、その内在的論理を身体的な経験として掴み出そうと試みているからだ。鍵となるのは、抽象化された「概念」としての「氷原」である。安部公房はSFを「仮説」の文学と論じたが、宮野論文では、七万五千年前に「ホモ・サピエンス」現生人類が絶滅しかけたという「トバ・カストロフ理論」という「仮説」を軸に、人々の記憶の淵源に位置する「氷原」のイメージが抽出される。ここで宮野の試みは、旧来の《北海道文学》の範疇に収まらず、日本近代文学史において無視されてきた中野美代子の『海燕』（一九七三年）を中心に置くことで、旧来の歴史学を根本的に変革したアナール学派の歴史家フェルナン・ブローデル（一九〇二～一九八五年）が提唱する数万年規模で歴史と人間を捉え直す「長期持続」の視点を、文芸批評へ本格的に導入したものと読むこともできる。

倉数茂「北方幻想——戦後空間における「北」と「南」」は、本書に収録された論考のなかでも、とりわけ表象文化論の文脈が強く意識された逸品だ。倉数論文では、歌謡曲『岸壁の母』に始まり、『北海道文学』と『北海道SF』の諸作品が横断的に分析されていく。そのシャープな筆致を通じて、「南方幻想」と「北方イメージ」が、対比的に論じられるのだが、スケールの大きな議論の背景には、公法学者カール・シュミット（一八八八～一九八五年）による「空間意識」が時代とともに変遷し、その変遷が新たな歴史状況を生み出していくという考え方が根ざしている。そして、倉数論考を通じて見えてくるのは、北方的な「空間意識」、すなわち「満州国」や「シベリア抑留」を源泉とするトラウマが、戦後の日本社会を駆動させる重要な原動力となってきたことである。東西冷戦の終焉後、炙りだされる「日本人」の歴史認識は、いわゆる「ネット右翼」に代表される極端な排外主義と、いかに切り結ばれるのか。倉数は一九九〇年代から「早稲田文学」や「文學界」等の文芸誌で持続的に論評を発表してきた。「北の想像力」執筆チームでもっともキャリアの長い批評家だが、本論が指定する「辺境」というスタリオンから映し出されるアクチュアリティに満ちたヴィジョンは、強烈なインパクトを与えるだろう。

倉数論文が「北の想像力」を水平的に扱ったものだとするれば、石和義之の「北と垂直をめぐって——吉田一穂」は、

詩人・吉田一穂（一八九八～一九七三年）を中心に「北の想像力」を垂直的に捉えるものである。この「垂直」とは何だろうか。石和は「垂直性」を、一般的な秩序としての「水平性」の次元からはみ出る剰余として捉える。石和は、田村隆一や詩誌「荒地」に代表される戦後詩の文脈を的確に押さえつつ、微温的な快樂原則に身を委ねる戦後日本の「水平的な精神状況へ、果敢に異議申し立てを行なう。その原動力として、埋もれた「垂直性」の再評価がなされるのだ。現在、地方公共団体主導の「ゆるキャラ」がしばしば話題となる。この「ゆるキャラ」は、「日本的叙情」の（記号化され類落した）現在形にはかならないだろう。吉田に代表される「垂直性」を内包した詩人の「歌声」は、「ゆるキャラ」的なヌルさとは、対極に位置するものなのだ。つまり石和は、吉田一穂を通して快樂原則の彼岸を模索している。石和論文を読み終えた者は、誰しもが叫ばんとすることだろう。「北の歌声にリスベクトを！」と。徹底して反時代的だった吉田一穂を通じ、石和の批評は、軽佻浮薄な現代の知的状況へ一石を投じる。

【第2部 「北の想像力」とSF史」は、本書を特徴づける《北海道SF》について、主題的に扱った三本の原稿を集めたものである。

【第5回日本SF大会（Varicon 2012）「北海道SF大全」パネル再録」は、二〇一二年に夕張で開催された日本SF大会でのパネル・デイスカッションを録音し、文字起こしの上で、読みやすく整理をしたものだ。本パネルに参加した巽孝之と小谷真理は、いわば地域SFという批評的アプローチの生みの親だが、彼らの参加によって本パネルは事実上の《北海道SF宣言》に仕上がった。巽は荒巻義雄・川又千秋を中心に《北海道SF》を概説し、小谷真理はアニメーション作品「センコロール」（二〇〇九年を情熱的に語ってトランスメディア的な評価軸を《北海道SF》に導入する。両名の議論を承けた松本寛大は、吉村昭（一九二七～二〇〇六年）の『飄風』（一九七七年）を中心に、ポスト3・11における「北の想像力」の意義を力強く謳う。増田まもるが補足する「近代」を語るうえで、ジレンマも見逃ごせない。地域SFの成立過程が詳細に解説され、また《北海道SF》関連人物について論じた詳細

な註釈が付されてもいる本稿は、話し言葉ゆえの親しみやすさも相まって、恰好の《北海道SF》入門となるだろう。

三浦祐嗣「北海道SFファンダム史序論」は、「イスカーチェリ」の編集長を務めるなど、《北海道SF》に深くコミットした当事者が《北海道SF》の歴史を振り返るといえるものである。三浦が依拠する小松左京の定義によれば、ファンダムとは「自分たちで何らかの活動をしているファンの総体」を指すものだ。三浦論考では、その歴史がアメリカでの草創期から振り返られ、戦後日本SFの歴史、そして北海道におけるSFファンダムの誕生と発展に重ね合わされる。ファンダムでは、ファンジンと呼ばれる同人誌と、コンヴェンションと呼ばれるSF大会などのイベント開催が活動の主軸となっている。三浦論文を読んだ者は、若いファンの献身的な活動が《北海道SF》の興隆を支えてきたことを深く感じ取るだろう。それとともに、現在では大家となった文化人の名前が、さりげなくSFファンダムの参加者として登場することに驚くのではなからうか。三浦自身、「北海道新聞」の文化部長として——文学のみならず——広く北海道の文化に関わってきた。尽きることなきSFファンの情熱は、社会に伏流のごとく影響を及ぼしてきたのだ。

藤元登四郎・岡和田晃「荒巻義雄の謎——二〇二三年の証言から」は、インタビューと論考を融合させた、珍しい試みである。二〇一三年で八十歳を迎えた荒巻義雄は、北海道初のSFファンジン「コア」の創始者の一人で、最初にプロ作家となった人物でもあり、これまで百八十冊の著書を刊行してきた。SF作家・評論家としての顔に留まらず、二〇一二年度の第四十六回北海道新聞文学賞を詩部門で受賞するなど、詩人としての評価も進んでいる。本稿は、小樽というトポスでの原体験、哲学者ドゥルーズ&ガタリの「脱領土化」という概念、あるいは荒巻独自の的方法論「ヴィジョン高速筆記法」といった多角的な論点から、その創作の秘密に迫るものだ。メイン執筆者の藤元は、荒巻義雄について持続的に思考を重ねてきた気鋭の論客で、著書『シュルレアリスト精神分析 ポッシユ+ダリ+マグリット+エッシャー+初期荒巻義雄/論』(二〇二二年)は、自費出版ながら第三十三回日本SF大賞

候補にノミネートされる快挙をなした。近年、複数の批評家により初期荒巻作品の再評価が進んでいるが、本稿は作家の内奥に切り込み、最新の研究成果を伝えてくれる。

【第3部 「北の想像力」と科学】には、科学(数学・地形学・病理学)に焦点化することで《北海道SF》を分析した、三本の論考が収められている。

渡邊利道「小説製造機械が紡ぐ数学的『構造』の夢について——《北海道SF》としての『田城塔試論』」は、いまもっとも注目されている作家・田城塔を真正面から扱った、本格的な論考である。「高度に専門的な数理的ロジックや概念を駆使し、メタフィクショナルな構造の複雑化を大胆に押し進めるユーモアたっぷりの作風」をとる田城の作品は、従来、とかく「難解」の二言で片付けられてきた。渡邊は田城の「四角い円」(二〇〇九年)を詳細に読み込み、「難解」という紋切り型に覆い隠された本質を解き明かす。ここで渡邊が活用するのが、数学の歴史だ。渡邊は数学と哲学の相同性を前提にしつつ、ガウス(一七七七―一八五五年)による複素数平面の体系的規則性の証明、ヒルベルト(一八六二―一九四三年)によるユークリッド幾何学の再検討を通し、田城作品には「構造」そのものを愉しませるという姿勢が、内在的に備わっているのだと述べる。この「構造」の意義を説明するために、渡邊は《北海道文学》の「世界文学」性、モダニズムの美術理論、さらには構造人類学の観点と、学際的な枠組みをカラフルに繰り出しながら、田城作品の「構造」のなかに、他者性の感覚が根付いていることを証立する。他者性を軸にした田城作品の「優しさ」は、「北の想像力」へ、さらなる「奥行き」をもたらしうるものだろう。

磯部剛喜の「わが赴くは北の大地——《北海道SF》としての山田正紀の再読」は、日本SF第二世代(一九七〇年代デビュー組)を代表する作家・山田正紀(一九五〇年)が、『襲撃のメロデー』(一九七六年)、『氷河民族』(一九七六年)、『人喰いの時代』(一九八八年)といったSF作品で、繰り返し、北海道を重要なモチーフとしてきたことに着目する。このことは、山田の処女長篇『神狩り』(一九七五年)の問題意識を継承したものでありながら、「北海道という



地形学的なヴィジョンの持つ神秘主義を探ろうとした試みでもあると、磯部は分析するわけだ。背景にあるのは地形学という考え方である。これは「文学的な想像空間を構成する地史的な背景」を論じるための方法論で、大江健三郎（一九三五年）の小説で語られる「四国の森」のような空間を念頭に置けば理解が早いだろう。山田が北海道に見出した「神秘主義」と、ナチス・ドイツが打ち立てた偽史的な世界観の類似性にまで射程を広げる本論は、SF評論家でありながらUFO現象学者としても知られる磯部の面目躍如たるどころではなからうか。

高槻真樹「病というファースト・コンタクト——石黒蓮昌「人喰い病」論」では、現役の外科医でもある作家・石黒蓮昌（一九六一年）、深川市出身の小説「人喰い病」（二〇〇〇年）や「冬至草」（二〇〇四年）が分析対象となる。石黒は純文学の雑誌「海燕」（一九八二～一九九六年）の新人賞でデビューし（一九八九年）、芥川賞候補に三度ノミネートされているが、同時にその作品は、ハードSF（科学的な整合性を重視したSF）としても高く評価されてきた。高槻論文では、北海道を舞台に「未知の病」との戦いを描く石黒作品が、しばしば「登場人物の行動や会話」よりも「病の正体を突き止めるための仮説の提示と実験による検証の積み重ね」を重視している点に着目する。ここで召喚されるのが「風土病」という観点だ。「風土病」を持つ「自然からの警告」という側面に耳を傾けず、ただなぎ払うことにのみ熱中するならば、かえって被害は拡大する。北海道の風土病ではエキノコックスが悪名高いが、その蔓延は、北海道における観光産業の発展と軌を一にしていた。媒介者であるキタキツネを狩る一方で観光資源としてアピールし、観光客との接触を防ぐ注意はおざなりだった。この結果、被害は全土に拡大してしまった。つまり風土病には、「自然」を人間の意のままにコントロールしようという欲望の歪みが、如実に反映されている。それは人間が不用意に「原子力」を利用する危険性にも通じるものだ。高槻論文は、この「構造」にこそ目を向けよと、読者へ強く呼びかける。

「第4部 「北の想像力」と幻想」では、狭義にはサスペンス・ホラー・口承文学の各ジャンルにおける「北の想像力」を扱った三本の論考で構成されている。

忍澤勉「心優しき叛逆者たち——佐々木譲の軸の位置」では、サスペンス・警察小説・冒険小説の第一人者として著名な作家・佐々木譲（一九五〇年、夕張市生まれ）を取り上げる。忍澤は、佐々木の思考は「一九六八年」を経由したことで形作られたとし、その「社会性」が意識された作品群は、3・11東日本震災を経由した今だからこそ、若い世代に読み継がれるべきだと考える。膨大な佐々木譲作品のなかで、北海道が重要なモチーフとなるものの割合が多いことを突きとめた忍澤は、『武揚伝』（二〇〇一年）をはじめとする幕末明治期を扱った七作品において、「北海道」へと「移動する」主体が描かれることに着目する。この議論を承けた後半部で検討される「死の色の封印」（一九八四年）、『白い殺戮者』（一九八六年）、『牙のある時間』（一九八八年）の三作品は、いずれも「移動する」主体が超自然的な要素と出逢うというものとなっている。このような超自然的要素によって、北海道とアメリカの相同性から見る「歴史」の問題、放射性廃棄物やアイスにまつわる「現在」の問題、それらを多面的に伝える「語り」の問題が、浮かび上がってくる過程はスリリングで、ラストで示される夢想に「社会性」を与えている。忍澤論文のヴィジョンは「第51回日本SF大会（Fiction2012）北海道SF大会」パネル再録」における松本寛大の発言を、別方面から補完する内容ともなっている。

その松本寛大の論考「朝松健「肝盗村鬼譚」論——「密」の向こう側の世界」では、日本を代表するホラー・伝奇作家となった朝松健（一九五六年、札幌市出身）が論じられる。朝松は「イースカーチェリ」や「黒魔団」といったSFや怪奇幻想文学のファングループで研鑽を積み、長じて国書刊行会の編集者となってホラー小説や魔術書の紹介に携わる……という経歴で知られるが、日本における「クトゥール」神話「神話」紹介者、現役の神話作家としても名高い。松本論文は、作家の転換点を示した「クトゥール」神話「神話」紹介者、現役の神話作家としても名高い。「人はいかにして作家になるか」という主題へ正面から向き合う。自身、実力派のミステリ作家で、会話型RPG（ロールプレイングゲーム）の仕事中でも「クトゥール」神話」に関わってきた松本は、想像力を駆使し、時には足を使った調査を経て、朝

松の原体験にシンクロしようとする。あるいは今では入手困難な『肝盗村鬼譚』の原型短編を含め、朝松の作品群をきめ細やかに読み解いていく。松本の抑制が利いた語りを通して見えてくるのは、朝松が「クトゥルー神話」の創始者たるラヴクラフト（一八九〇～一九三七）に学ぶことで、現実世界の彼方へ続く想像力の「窓」を獲得していたことだった。この「窓」を介することで、作家は内なる孤独を祈りに換え、創作へと昇華させることができるのだ。

丹菊逸治「SFあるいは幻想文学としてのアイヌ口承文学」は、アイヌが受け継いできた伝統文学を扱った異例の批評だ。「宇宙塵」を主宰した柴野拓美（一九二六～二〇一〇年）の理論を援用しながら、「現代科学の延長上で未来に実現しようと考えうる現象と、それによる現実世界の変容をテーマとする作品」としてSFを定義し、アイヌ伝統文学に類似の構造があるかを検証していく斬新な試みである。実際、アイヌ口承文学のなかでも、ワカルバ（不明～一九一三年）が口述した『虎杖丸』や、金成マツ（一八七五～一九六一年）が筆録した『ユーカラ』のような「叙事詩」には、超自然的な要素が頻繁に登場する。丹菊論文では、それら超自然的な要素は現実と地続きのものであるという。では「カムイ神学」と、SFが前提とする近代の世界観には、いかなる差異が根付いているのか。丹菊は、叙事詩をはじめ「語られたもの」である口承文芸を、あくまでも「書かれたもの」であるSFから考えるためには、「外部の価値観による印象批評」ではなく、「アイヌ伝統文化にかなする知識と内部構造の分析」が必要不可欠になると告げる。それはまた、「北の想像力」から、当事者性を欠いたステレオタイプとしてのオリエンタリズムを、引き剥がしてゆく作業ともなる。アイヌ口承文学は、私たちの想像力が見落としてきた前提を、絶えず問い直すものなのだ。

【第5部 「北の想像力」とリアリズム」では、『北海道文学』が論じられる。リアル／ヴァーチャルの安直な二項対

立に頼らず、北海道という社会が文学に与えた影響の問題を本腰入れて考えることは、『北海道SF』の可能性を拓くことにも繋がるのだ。

東條慎生「裏切り者と英雄のテーマ——鶴田知也」「コシャマイン記」とその前後」では、鶴田知也（一九〇二～一九八八年）の文学と、それに関した（主に）戦前の北海道における政治状況が論じられる。鶴田は「文芸戦線」誌でデビューし、アイヌの叙事詩を擬した「コシャマイン記」（一九三六年）で第三回芥川賞を受賞した。つまり鶴田は「プロレタリア文学」の書き手で唯一、芥川賞を受賞した作家なのだが、戦後は農業指導者へ転身し、現在、完全に忘れられてしまっている。東條論文では、「コシャマイン記」以前と以降の鶴田作品を丁寧に追いかけてながら、一人の作家というフィルターを通し、近代の北海道が直面した運命が、いかなるものだったかを鋭く問う。特筆すべきは、もはや評伝の域に達したともいえる、調査の精度だろう。鶴田が遺した単行本の多くは戦前に刊行され、あるいはその短編は雑誌に載ったきり、リプリントされていない。東條は粘り強く国会図書館へ通いつめ、それらの作品を掘り起こす。結果、見えたのは、戦時下に作家として生きることの困難、つまり自作で糾弾したような権力者や差別者の「裏切り」を、自身として再演せざるをえない状況へ、追いやられてしまった鶴田の姿だった。排外主義が猖獗を極める現代社会もまた、戦時下だとすれば、鶴田が抱えたジレンマは、私たち自身の問題でもあるだろう。

横道仁志「武田泰淳『ひかりごけ』の罪の論理」は、安部公房と同じく戦後文学を代表する作家・武田泰淳（一九二二～一九七六年）の問題作『ひかりごけ』（一九五四年）に的を絞り、その倫理的側面を徹底して考えぬいたストロング・スタイルの大作論考である。『ひかりごけ』では、極限状態において人が人を殺し、その肉を喰べるといふ行為の是非が正面から問われる。知床沖で起きた実際の食人事件を下敷きとしたといわれる『ひかりごけ』では、食人という「罪」を犯した「船長」が、なぜか聖人のように描かれている。だが、彼を善悪の彼岸を踏み越えた超越者だと短絡的に判断してしまえば、作者が仕組んだ陥穽に嵌まってしまふ。横道は、これまでの解釈の問題点を丹念に洗い出しながら、『ひかりごけ』というテクストが、人間の本性を突き詰めることで、広く「文明人」が内に秘めた

差別性を暴き出そうとする作品だということ突き止める。社会倫理を踏み越えた「野蛮」な食人者は、何ら特別な存在ではなく、私たちの似絵にほかならない。それは「天皇」を空虚な中心として措定し、包摂したはずのアイヌを内なる他者として排除する近代の日本社会を駆動させる原動力にほかならないと、横道論文は喝破してみせる。

岡和田晃「辺境という発火源——向井豊昭と新冠御料牧場」は、天皇とアイヌの問題を、新冠御料牧場という「辺境」から問い直すものだ。向井豊昭（一九三三〜二〇〇八年）は「近代文学の終り」（柄谷行人）が叫ばれるなか、日本という空間の同調圧力へ果敢に叛逆する革新的な作品を発表し続けた、特異な「マイナー文学」（ドゥルーズ&ガタリ）の書き手であるが、その出発点となったのが「御料牧場」（一九六五年）だった。これは、自身が一九六〇年代から七〇年代にかけて実存をかけてコミットしたアイヌと教育をめぐる問題を、一小学校教師の視点からリアリズムを軸に綴った小説である。表題は、道南の静内町（現・新ひだか町）・新冠町にまたがる天皇のための牧場から採られているが、その土地は、もとをたどればアイヌを強制移住させて確保したものだ。語り手は御料牧場の歴史を小説化しようと試みるが、そこには在日朝鮮人の問題も絡み、排除されたアイヌの痛みを傾ければ、御料牧場をめぐる歴史の壁に突き当たることとなる。こうした壁は、実は一八七〇年以降の日本が抱えた帝国主義と植民地支配の諸矛盾を、凝集したものだ。3・11東日本大震災を経たあとの日本は、間違いなく世界の「辺境」となりゆくだろうが、その先を考えるために、近代が見過した「辺境」の矛盾を、今こそ考えなくてはならない。

第6部 「北の想像力」と海外／メディア」は、『北海道SF』という枠組みを拡張して考えるためのヒントとなるような論考を五本、収めている。とりわけ「SFマガジン」や「SFが読みたい！」などの媒体で海外SFの最新事情を精力的に紹介しているレビュアー・橋本輝幸が、英語圏で今もっとも注目を集める新鋭キャサリン・M・ヴァレンテの「静かに、そして迅速に」を『北海道SF』の観点から紹介していることは注目に値する。また、藤元登四郎

が、今や古典ともいえるフィリップ・K・ディック『いたずらの問題』を論じている。岡和田晃は川又千秋「魚」を、日本SFの英訳という観点から再評価する。渡邊利道は侯孝賢監督『ミレニウム・マンボ』を介して映画における「北の想像力」を考え、石和義之は——伊福部昭作・編曲「SF交響ファンタジー」を通じ——なんと音楽という視点から、「北の想像力」の内実を追ってゆく。それぞれの論考は作品論として独立しており、第1部から第5部の諸論考よりも短いので、この第6部から読み始めるのもよいだろう。なお、これらの論考は、第51回日本SF大会（Watson's）の公式ウェブサイトに掲載された「北海道SF大全」から精選し、各執筆者による改稿を加えたものとなっている。あらかじめお断りしておきたい。

第7部 「北の想像力」を俯瞰する」には「北の想像力」を考えるためのブックガイド」として、執筆チームによる四〇〇〜六〇〇字程度のガイドを収めている。その総数はおよそ一七〇作品超。ブックガイドと銘打っているものの、小説・詩のほか、アニメーション・映画・ゲーム・コミック等、活字以外のメディアについても紹介している。フィクションだけでなく、理論的な視座を重視し、評論の紹介にも力を入れているのがひとつの特徴だろう。浦高晃の協力により、*Hokkaido Green*なる特異な作品の紹介も可能になった。単体でのレビュー集として愉しめるのももちろん、執筆者の論考を読み解くための参考としても読めるようになっていたので、ぜひ、このブックガイドを活用ながら、あなたにとっての「北の想像力」の意義を考えてみてほしい。

【付記】「辺境という発火源——向井豊昭と新冠御料牧場」の解説は、批評家の山城むつみ氏からお寄せいただいたご意見を参考にしています。この場を借りて氏に感謝いたします。